
ココ・イン・ザ・ルーム

Coco in the room

屋里的可可



セカイは微生物に満ちている

ココ・イン・ザ・ルーム

Coco in the room

屋里的可可

- P03 scene 1 ワークスペース
P06 scene 2 バルコニー _ カナタの場合
P10 scene 3 キッチン _ フウの場合
P15 scene 4 シャワー _ ウタの場合
P19 scene 5 リビング _ フウの場合

English translation

- P25 scene 1 Work space
P28 scene 2 Balcony _ Kanata's perspective
P32 scene 3 Kitchen _ Fou's perspective
P36 scene 4 Shower _ Uta's perspective
P40 scene 5 Living room _ Fou's perspective

中文翻译

- P46 scene 1 工作间
P48 scene 2 阳台 _ 卡纳达
P51 scene 3 厨房 _ 福
P54 scene 4 淋浴 _ 乌达
P57 scene 5 客厅 _ 福

登場キャラクター

フウ (Fou)

人間の女性。35歳。ウタのパートナー。フードコーディネーターとして、食品微生物や腸内微生物環境の解析と、そのデータを活かしたブレ/プロバイオティクスレシピのデザインに取り組む。在外インド人の祖母を持つ移民三世。

ウタ (Uta)

人間の女性。33歳。フウのパートナー。保険会社のアクチュアリーとして、加入者の微生物環境までを含めた総合的なリスク評価を得意とする。東北の農村の出身で、庭いじりが趣味。

カナタ (Kanata)

人間の男性。11歳。フウとウタの養子。生まれた時から微生物の知覚技術を当たり前ものとして育った世代のためか、自分と他人の境界線が曖昧。最近ではボクシングと囲碁に夢中。

ココ (Coco)

ウエスト・ハイランド・ホワイト・テリア (ウエスティ) の女性。活発でボール遊びが好き。

scene 1
ワークスペース

「ほんと急にごめんなさい。他に慣れてらっしゃる方、知らなくて」

そう言いながら頭を下げるリーさんを、ウタがデスクまで連れてきた。フウが立ち上がって会釈する。ワークチェアが慣性で少し回り、止まる。

「気にしないでください。ハノイでしたっけ」

近所のリーさんから連絡を受けたのは一昨日の夕方だった。家族の都合で3、4日家を空けるのでキュータを預かってほしい、と言われた。そのときウタは庭のゴボウを抜き、カナタは音の鳴るぬいぐるみでココをからかっていた。コウモリだった。フウはカレンダーを確認して、ええ結構ですよ、と短く言った。2041年が6分の1ほど、終わっていた。

「祖父の具合が悪いみたいで、ほんとにごめんなさいね」

背の高いリーさんは恐縮すると猫背になって、体積を小さく見せようとする。無意識のようだった。それと裏腹に、リーさんの腕の中のキュータはちぎれそうなほど尻尾を振り回して、自分の存在をアピールした。グウグウ、キュウキュウと鳴っていた。鼻の低い犬に特有の、湿った袋から空気が抜けるような声だった。

「よければもう下ろしちゃってください」とフウが言い、リーさんがありがとうございますと言いながらしゃがんだ。キュータが腕からずりりと抜け出して、ウタの足元を回る。タシタシと、肉球がラグを叩く音がした。同時に、リビングで機会をうかがっていたココが一目散に駆け寄ってくる。

「ココ、ステイ！」ウタが短く指示を飛ばす。が、無視される。ココは八の字を描くようにリーさんとキュータを交互に回る。キュータの倍の速度だった。なんども鼻を近づけて匂いを確かめ、また回った。久しぶりの来客を隅々まで観察するつもりらしい。

「ウエスティですか」リーさんが珍しそうにココを見て、スマートグラスを指で調節する。「元氣すぎるもので」ウタが苦笑しながらココを抱き上げる。さんざん来客をチェックして満足したのか、ココは短く鼻を鳴らした。天井の換気システムが低く唸り、リビングのディフューザーからミストが吹き出る。庭から流れ込む風と混じる。ほろ苦い、レザーの香りが漂う。家のセンシングシステムに、リーさんとキュータの微生物環境が登録されたのがわかった。

「ごはん以外でアレルギーとかありますか」うちは換気も屋外式だし、ディフューザーもつけてるから大丈夫だと思うんですが、とフウが続ける。リーさんは全部言い切らないうちに、ええそれは全然、と笑う。ペキニーズは鼻とか肌とか弱いみたいだから換気強めにしとこうか、とウタが言う。

「キュータくんにもっかいあいさつしな」ウタが抱えていたココを放す。大きな身震い。白い毛がなびき、一ぱくおいて、キュータに駆け寄って、じゃれつく。必死に肛門の匂いを嗅ごうとしている。キュータがそれに応じるようにココの肛門に顔を近づけたので、フウとウタは驚く。それからしばらくの間、白と黒の毛玉たちはぐるぐると回転して、リビングへ消えていった。

ウタがリーさんに細かな注意事項を尋ね、フウはドッグフードをキッチンに持って行く。散歩は1日30分、ブラッシングを忘れずに、寝る前に微生物環境のチェックをして、できればディフューザーで森林浴を。そんな感じですかね、とリーさんが呟く。目が天井を泳ぐ。伝え忘れがないかを気にしている。ふと見ると、視界から毛玉たちが消えているのに気づく。さっきまでリビングにいたのに。「キュータ、庭出てるけど」ソファからカナタの声がする。デスクを囲んでいた3人はあわてて庭へと駆け出す。

庭土をキュータとココが掘り返していた。トマトとナスのあいだあたりだった。リーさんが駆け寄ってキュータを持ち上げる。その口になにか黄色いものがくわえられているのを、カナタが見つけていた。

「早速こんなことしちゃって」リーさんはますます背中を丸めて恐縮した。いいんですよ、むしろ見つけてもらえてよかったです。キュータがくわえていたのは、ココのお気に入りのボールだった。フウもウタも、だいぶ昔に無くしたと思っていた。

「なんでわかったんだろう」リーさんを見送り、ワークチェアに戻ってきたウタが呟く。「鼻がいいんじゃない」「ペキニーズはどっちかっていうと悪いと思うけど」「それでもわたしたちよりはいいでしょ」フウとウタはぼんやりとしたやり取りをしながら、歯型でポロポロのボールを眺めている。その足元に伏せているココとキュータが、期待を込めた目でボールを見つめている。視線に気づいたフウがボールを掴んで、リビングの向こうに向かって投げる。二匹がほとんど同時に跳ね起きる。黄色の放物線の軌跡をなぞるように、白と黒のかたまりが飛んでいく。

scene 2
バルコニー
—
カナタの場合

それはだいたい4月くらいのことだったと思う。一日じゅう土がふつふつと沸き立って、微生物の雲がバルコニーの向こうの空に伸びていった。ウタが前に、それは「啓蟄」といって、冬の間に眠っていた虫や植物が動き出す合図なのだとぼくに教えてくれた。

うちの庭の動き方は毎年だいたい一緒だ。ヨモギの葉がバサバサとぶしつけに膨らみ、エンドウがつぶつぶと白や紫の花を点滅させる。セロリのおいがはじめて空気がびりびりと痺れる。キャベツが水をいっぱいに含んで、その芯から垂れるミルクが水蒸気に白く溶け出す。あちこちでいくつかの山菜がぶつぶつと胞子を震えさせるのが聞こえる。そうしたさまざまなアピールを遠巻きに、モンシロチョウやテントウムシが様子をうかがっているのがわかる。

でもそれはほんの一部で、土の中で出番を待ってウズウズしてるやつらが山ほどいることを、ぼくは知ってる。やつらは絡み合う根っこと菌糸の網をすり抜けて、黄味がかかった4月の空で渦を巻く。

そうした微生物たちのいくらかが、ぼくの肌^{はだ}に降り注ぎ、ぼくたちになってゆく。ぼくたちはだんだんとぼくから膨らんでいく。ぼくたちはウタとフウのあいだをかわし、ココをまたぐ。窓をくぐって、バルコニーをぐるりと回り、そのまま街に投げ出される。風が吹いて、ぼくたちときみたちが重なり合う。そしていつしか、不意にぼくたちはぼろぼろとほどけてこぼれていく。身体の外からまんなかにむかって、ジンジンと痺れが伝わる。寝起きに思いっきり伸びをしたとき、それか、口の中でチョコレートが溶けるときに似ている。ぼくたちはぼくにピントを戻す。ぼくが目を開ける。

こうやって微生物や動植物の動きがわかるのは、最近の子供の特徴なのだとフウがいていた。なんでも、生まれたときから自分の感覚とセンサーのデータを自然に結びつけながら育ってきたおかげで、天然のシミュレータが身体に根付いているんじゃないか、とかなんとか。「わたしもそれができたら、もっといいレシピが思いつくのに」なんてフウは羨ましがるけど、春から夏にかけてのこのウルサさを味わってからいってほしいと思う。花粉やフェロモンを引き連れた微生物の洪水。この時期はずっと街じゅうが浮かれているみたいで、クラクラする。そう言うウタが「花粉症に比べたらかわいいもんじゃないか」とお決まりの文句を挟む。ふくれたぼくはココをこねくり回し、舞い上がった微生物のホコりに息を吹きかけて、二人にけしかける。濡れたアスファルトの匂いが部屋に立ち込める。

そうやってふざけながら、さっきぼくたちが庭を回った時のことが引っかかっていた。違和感^{いわかん}ってほどじゃない。生え変わる乳歯がムズ痒くなり始めたような、そんな、予兆めいたもの。うちの庭にはよくいろんなものが舞い込んでくる。ネズミにカラス、この間なんかケガしたムササビが石の陰にうずくまっていた。そういう時は決まってぼくたちにノイズが混じるから、ぼくが真っ先に気づく。でも今日のはちょっと違う。何か迷い込んだわけじゃない。でも毎年の浮ついた空気に比べて、どこか強ばっている。ココがぼくの手を必死に舐め回している。

*

それから、庭のようすになるべく気を配ってみることにした。あらためて眺める庭は、思った以上にぎやかだ。白い花がポツポツと灯り、ドクダミの香りが一段と強くなる。ときおりウタが庭に出て、春菊やウドを抱えて戻ってくる。空がぐずつきやすくなり、ツクサの青がぼうっと浮かんだかと思うと雨に落ちる。その雨粒が、まだ固いトマトの肌を伝う。ムクゲの花びらをカタツムリが舐め、その横でカエルが息を潜めている。

うちの庭は、自然に生える土着の植物と、食用の野菜や果物、それから観賞用の草花を組み合わせたひとつの生態系になっている、とウタが言っていた。植物の高さ、花の咲く時期、実のなる時期、枯れる時期、寄ってくる動物、必要な栄養、などなどの組み合わせが重要らしい。ウタは知り合いの造園家と相談しながら仕上げたんだ、とよく自慢していた。

実際、庭はそのにぎやかさにも関わらず、いつも全体が噛み合っていて感じられた。見た目にせよ、音にせよ、香りにせよ、微生物にせよ。部分が絶えず入れ替わりながら、ゆっくりと全体が動いていく。海辺に似てるな、と思う。寄せて返す波を見ているうちに、砂浜の形が変わっている。

その目まぐるしさを味わっていると、時々さみしくなることがある。微生物を通じて、植物と、動物と、人と、街と、際限なく溶け合っていく感覚。きみたちとぼくたちの境界線がわからなくなる。街を歩く他人を、なぜか懐かしく感じる。どこまでもぼくたちが広がって、結局世界はぼくたちひとりだけになる。

フウやウタはぼくのことを家族だっていう。ぼくも、フウやウタやココのことは大事だ。でもそれは結局、ぼくたちの一員だってことなのかな。家族とぼくたちはどう違うんだろう。家族っていう単位は、どこまでのびてるんだろう。ぼくはそれを、どこまでのばしていいんだろう。梅雨の合間に挟まる日差しに、遠慮がなくなり始めた。雲が低く、大きく、膨らみだす。つられるように、庭の違和感が大きくなってきているのが、わかった。

*

それは特に暑い日で、高く伸びたシソの葉がパリパリに乾いていた。おかげで普段より少しだけ、庭が静かになっていた。その片隅にチリチリと、耳慣れないなかが聞こえた。ぼくは庭に飛び出す。トマトが真っ赤に映える足元で、ミミズが石に影だけを焼きつけていた。やっぱりこの辺かな。ちょっと前から怪しいと思っていた庭の端。丹念に草をかき分けていく。何も無い。首の後ろを灼く日差しに耐えきれず、顔を上げる。バルコニーの手すりの陰から、溶けたロウソクが垂れている。ミツバチの巣だった。

バルコニーの手すりになにかがあるか、知ってる？——意気揚々と尋ねたぼくは、肩透かしを食らうことになる。

*

二人ともちょっと前から気づいていたらしい。でも、なんであんなところを調べようと思ったんだろう。二人は庭の様子が変わっていることに気づいてなかったはずなのに。あの巣はまだできたばかりだったし、ハチだってほとんど姿を見せていなかった。

「ココがソワソワしてるの見てさ、あっ、で思ったんだよ」フウがそう言って、ウタが頷く。ぼくはココを見る。いつもと同じように舌を出して尻尾を振っている。ぼくはスマートグラスを付けたり外したりする。集中して、ココのまわりに感覚を合わせる。でもやっぱり、いつもと同じだ。遊んでもらえると思ってウキウキしてる、いつものココ。「わかんない」「ココはちっちゃいころ、ハチに刺されてさ」「顔がパンパンになっちゃったんだよ」「それからさ、ハチが近くにいるとやけに神妙な顔になるの」「いまだに怖がってるとはねえ」「やっぱ、わかんないよ」「えええ、よく見てみてよ」「おんなじだって」

結局、ぼくはココの違いに気づけなかった。ずっと集中してみると、ときどき庭に緊張を向けている気もした。でもムキになりすぎたせいで、もう思い込みと区別がつかなかった。ウタは笑いながら「わたしたちはもう20年近くココといるんだからさ」と、なぐさめだか自慢だかわからないことを言ってきた。ぼくは無言でウタのスマートグラスを奪って、放り投げた。猛烈な勢いでココがそれを追いかけていった。

*

庭に出ると肌寒く、ひときわ熱れた空気が濃くなる。ウタがよく部屋で焚く、酒蔵のアンブルを思い出す。ホオズキと入れ替わるように、カラスウリの赤が壁を這う。ぼくはその中をかき分けて、石に背中をあずける。世界がもったりと動いている。砂糖水の中に潜ったみたいだ。

不意に、フウやウタやココ、みんながこの空気を共有していることを思い出す。フウやウタはぼくみたいに、微生物の流れや植物のちりつきはわからない。でも夏の匂いとか、春の風とか、ココの表情とか、そういうのはわかる。ぼやけた世界の中で、それぞれが、それぞれのやり方で、抽象的な輪郭を定めている。ぼくは授業で見たモネの睡蓮を思い出す。ほとんど失明したモネは、アトリエの一番後ろから絵を眺めて描いたって。だからあれは庭の絵じゃなくて、あの絵そのものが庭なんだ。ぼくが、ぼくたちの中に輪郭線を勘違いすること。それが庭を持つってことなんだ。

むかしウタが見せてくれた地図。それは潜在自然植生って言って、人間が手を加えないときに自然に生えてくる植生のことらしかった。この街だって放っておいたら、ちょっとずつ植物に占拠されて、みんな繋がってしまうだろう。なんだかそれはとても、自然なことのように思える。それでも、庭には庭にしかない風景があって、ぼくはそれをいいなって感じる。ぼくと、フウと、ウタと、ココが、それをいいなって感じる。どこまでが家族で、どこまでがぼくたちなのか、相変わらずわからない。でも最近、ぼくがぼくの庭だって言えるものをつくってみたい。そしてぼくがそれを見せるのはやっぱり、フウとウタとココなんだろう。

scene 3
キッチン
—
フウの場合

スツールの隙間^{すきま}にぴんと、白いアンテナが立っている。左右にせわしく揺れて、ふさふさの毛^けが騒いでいる。さっきからココがキッチンの段ボールをしきりに気にして、ウロウロしている。

「やっぱわかるんでしょ、好きなばっかだもん、今回」

ウタが感心したようにワークチェアから声をかけてくる。段ボールの中身はサツマイモ、ニンジン、カボチャ、ダイコン。ココの好物ばかり。普段から庭で採れたものはこうして料理に使うけど、今回は稀^{まれ}に見る豊作だ。いつもの段ボールを2箱使ってもこぼれそうなくらい。

「そう思うんならそっちで遊んであげて」

わたしはウタの机^{つくえ}に向かってボールを投げ、ココをけしかける。その隙に、箱の中身をキッチンに広げる。ごつごつとした野菜たちが、天板の上で思い思いの姿勢をとる。座^{すわ}ったり、寝転^{ねころ}んだり、逆立ちしたり。それぞれのキャラクターを誇示^{こし}しながらいくらか動き回って、止まった。表面に残っていた土がこぼれ、シンクの水に溶ける。ふんわりとした堆肥^{たいひ}の匂い^{にお}が鼻をかすめた。

アメリカのどこかで遺体^{いたい}を堆肥にできるようになった、って初めて聞いたのはいつだったっけ。ウッドチップといくらかの微生物^{びせいぶつ}を混ぜた棺桶^{かんおけ}に入れば、一ヶ月くらいで土に還れます、お好みでキノコ^{ふんかい}に分解してもらうことも可能です——悪い冗談^{かろう}だと思った。あと十数年経ったら、あなたもこの葬儀^{じょうぎ}を選びますよ——もし当時、そんなことを言う奴^{やつ}がいたら、冗談じゃないと思っただろう。

じっさい、人間をすぐさま堆肥にしようという前衛派^{ぜんえいは}は少なかつたけれど、ペットはその限りじゃなかった。むしろ「動物らしい見送り方」と「人間の新しい葬儀の予行演習^{えんしゅう}」を両立できると気づいた人たちから、熱心に支持^{しじ}された。わたしとウタは、ココが逝く少し前にいくつかの資料^{しりょう}を集めた。火葬された骨^{ほね}が思った以上に土へ還らないことと、家庭の庭でサツマイモを育てるやり方を知った。手元に残すならカルシウムのペレットじゃなくて、ココのおやつの方がいいと思った。それからしばらくして、ココは真っ黒い堆肥^{たいひ}になった。わたしとウタはそれを少しずつ手ですくって、庭の土に混ぜた。その年から、庭の野菜や果物の種類^{しゅるい}が増えた。

「あれにしようよ、ほら、炊き込みご飯」

ウタがココを抱いてキッチンにやってくる。あんまり遊びをせがまれるから、仕事をあきらめたらしい。タマネギを切っていたわたしはスマートグラスを外して涙^{なみだ}をぬぐう。ウタの腕^{うで}の中のココがフッと消える。

昔のスマートハウスよろしく、うちみたいなバイオスマートホームにもアシスタント機能が備え付けられている。違う点^{ちが}といえば、このアシスタントはただの独立したAI^{どくりつ}じゃなくて、家にとりつけられた膨大な数^{ぼうだい}と

種類のセンサー情報全体をまとめるヴァーチャルな人格でもあるってことだ。要するに「この家の気持ち」を表現するアバターみたいなもので、これを通じてわたしたちは家とコミュニケーションがとれることになっている。

わたしとウタはこのアバターをカスタムして、ココの3Dモデルを設定していた。スマートグラスを通じてアクセスできるARのココは、肉体を持っていたあいだの十数年分のデータからつくられている——見た目から動き方、身体を取り巻く微生物環境に至るまで。ピンと立った耳とツヤツヤの毛並み、テーブルの下で丸まって昼寝をし、目を離れた際に庭のニンジンを引きこぼす。

「いいよ、カナタの明日のお弁当にもなるし。いいでしょ」

リビングのカナタに声をかけると、んー、と生返事が返ってくる。スマートグラスを掛け直すと、ココはもう、ソファの向こうでまどろんでいた。

確かに今のココは、映像と微生物カクテルのあいだに結ばれるかばそい実感でしかない。小さい体でリードを引っ張るココの力強さを味わうことは、もう、ない。でも今のココはアシスタントを通じてうちと同期されている。家の調子そのままココの調子で、つまり、わたしたちがここで暮らし続けていることそのものが、ココと触れ合ってるってことなんだ。そう無邪気に信じられるくらい、屋下ガリの部屋のゆるんだ空気と、スヤスヤ眠るココはピッタリだ。

ごはんが炊き上がる間に、いくつかのお皿を仕上げる。サツマイモと根菜を素揚げして、甘酢の餡をからめる。薄く刻んだダイコンとニンジンは、橙で香りを付けてなますに。残った野菜くずで汁物を作って一段落。

「庭のやつ持ってきてつまんでようか」

そう言ってウタが表に出てあったジャーを持ってくる。油で光る色とりどりの野菜がギューギューに詰まっていて、蓋を開けると複雑な香りが立ち昇る。クミンやジンジャーをはじめとしたスパイスの刺激と、マスタードオイルのこってりとしたまろやかさを、乳酸発酵の酸味が上手につないでくれている。いつのまにかカナタもスツールに座って、ジャーをつついている。

天日干しにした野菜とスパイスに、熱した油をかけてジャーに詰める。あとはそのまま陽の当たるところに置いておけば、発酵が進んで一週間くらいで食べ頃になる。インドやネパールでは馴染み深い漬け方らしい。知り合いにはいつも「お母さんに教わたの？」って聞かれるけど、ネットで見つけたのをアレンジしただけだ。わたしの実家は母も父も、インドらしい料理は大してつくれない。祖母や遠い親戚になると話は別だけど。

わたしたちは普段、自分たちのルーツがアフリカにあるってことを意識しない。住んでるところがヨーロッパだろうと、アジアだろうと、アメリカだろうと。わたしとインドの関係もきつと、その延長みたいなものだ、きつと。そういえば、インドには微生物の殺生を禁じる宗教があるらしい。わたしの大叔父もその信徒で、白いマスクをつけて足元を箒で掃きながら歩いていた、と祖母から聞いた。わたしだって料理をつくるときは、微生物の命について考える。でもそれはかわいそうとか、罪深いとかじゃなくて、美味しそうとか、仲良くやろうよ、なんだ。

炊き上がったサツマイモごはんは、他のお皿と組み合わせてあつという間に食べ尽くされてしまった。取り分けておいた分をおにぎりにして冷蔵庫にしまう。段ボールにはまだまだ野菜が残ってる。わたしはウタとカナタをキッチンに呼んで、よく手を洗わせる。

「ウタが糠床で、カナタは葉っぱね」

そう言って二人に手袋を塗る。うちで作ってる発酵食品はわたしが逐一、でき具合を解析している。その上で発酵の改善によさそうな微生物カクテルをつくって、漬け込みのときに一緒に混ぜ込んでもらっている。ウタとカナタはそれぞれ別の乳酸菌株を中心とした手袋をつけて、ニンジン糠床に沈めたり、刻んだダイコンの葉っぱを唐辛子と一緒に糞に押し込んだりしている。これで、発酵のメンテナンスと仕事のためのデータ集めが同時にできるって具合だ。

作業を終えた二人がキッチンを離れる。わたしはパントリーの扉を開ける。パントリーは食品の微生物環境をモニタリングして、熟成や発酵、腐敗の具合を報告してくれる。要するに、小さなバイオスマートホームみたいなものだ。普通は食品管理とか慣れない発酵のサポートのために使う設備だけど、わたしは会社の設計システムとつないで、新しい発酵食品の試作用のラボにしている。

わたしはサツマイモを用意する。丸ごとや薄切り、泥をつけたままでもいいかもしれない。あとは、ペーストにしてみたらどうだろう。たしか奄美大島にはサツマイモと乳酸菌でつくる発酵飲料があったはずだ。乳酸菌、酢酸菌、麹、酵母、何種類かのカビ。パントリーの空間を分けながらさまざまな発酵の準備を整える。日本酒では麹に音を当てて酵素の性質を変えるやり方があったっけ。わたしはパントリーにスピーカーを入れるならどこがいいか、考え始める。

発酵と腐敗は紙一重だっってよく言われるけど、要するにどっちも微生物による分解だ。ココは分解されて堆肥になって、自分が好きだったサツマイモを育てている。わたしたちはそれを料理して食べたり、こうして発酵食品にしたりする。ココは分解されて生まれ変わって、また分解されて、また生まれ変わる。ココは部屋の中や庭の土、わたしたちの身体の中を通り抜ける。

パントリーの中でどんな食べ物が生まれるのか。まだ何もわからない。でもだからこそワクワクする。微生物と一緒に料理をつくること。わたしはココからできたサツマイモが醸されて、また別のココになるんじゃないかって思ってる。

わたしが次にパントリーを開けると、奥^{おく}からココがひょっこり顔を出してくる。そんな想像^{そうぞう}をしながら、わたしは扉を閉める。

scene 4
シャワー
—
ウタの場合

「ココがいちばん濃いのはどこ？」

そう口にする。いや、仮にね。なにを言ってるのかって？今はわからなくてもいい。とにかく、わたしは自分がそう尋ねるさまを想像する。

想像の中で、フウが愛おしげにディフューザーを撫でる。ネイルが鈍く光る。焦げた砂糖の色をしている。カナタがココのお気に入りだったソファに飛び乗る。バルコニーから土と水の匂いが吹き込む。わたしはシャワーのハンドルを上げる。ホースが身震いする。シャワーヘッドの鏡面がにわかには艶めく。幾千もの雫が姿を得る。くふふ、と聞こえた。昔、おじいちゃんに教えられて鶏を絵にしたことがある。10歳のころだ。締め上げられた首をなんとか通り抜けようと、手の下で空気や血液が震えていた。鶏は泡と声のあいだのようなものをこぼして死んだ。くふふ、といった。

温んだ水の粒子がわたしの身体を叩いてタイルへと流れる。バスルームに蒸気が満ちる。わたしはそれを思い切り吸い込む。上顎の裏に細かく砕けた湯気がへばりつく。舌がわずかに湿る。甘苦い水の風味がほのかに広がって、わたしはいつも、ココの吐息を思い出す。

シャワーヘッドが微生物の温床だと話題になり始めたころ。神経質ないくらかの人たちはシャワーの度に窓を開けたり、風呂上がりに丹念にヘッドを乾燥させたりしていた。一方わたしとフウは、生まれたばかりのココの真っ白い毛並みに顔を埋めて、深呼吸をしていた。バターを入れすぎたポップコーンの匂いがした。フウはよくクシャミをして、アレルギーかも、と呟いてはまた鼻を近づけた。だから、あの毛穴みたいなシャワーヘッドに微生物が詰まってるって言われても不思議でもなんでもなかったし、むしろなんだか親しみが増す気がしていた。

いつしかシャワーヘッドは微生物モニタリングの実験場になっていた。それは健康不安を覚える人、微生物の利用に好意的な人、特に何も考えていない人、それぞれにとって正当性があるように見えた。

今ではディフューザーと同じように、多くのシャワーには微生物カクテルユニットが取り付けられている。わたしたちはそこに思い思いの微生物アンプルを突っ込んで、水質をアレンジする。ある人は、いくつかの無機アンプルを突っ込めるようにユニットを改造して、各地の温泉を再現した。ある人は、肌質に合わせて表皮常在菌をミックスして「浴びる化粧水」だとうそぶいた。またある人は、アンモニア酸化細菌に汗を食べさせ、かれこれ数年は石鹸を使っていないという。

わたしはといえば、そうしたいずれも信じきれずにいた。でもそれはその昔、除菌グッズなんかに感じていた胡散臭さと大して違いはないんだろう。微生物を減らすのも増やすのも信じられないのなら、とりあえず増やしておこう。わたしには、少なくともそう考える程度には、今っぽさがあった。いや、実際のところ、

ミネラルと微生物のバランスを調節されたこの水は嫌いじゃなかった。シャワーヘッドから水が吹き出す度に、醸された甘い土の匂いが立ち込める気がした。墨のようだ、と思った。それはおじいちゃんの家で飲んだ水に似ていた。コップに注がれるよく冷えた井戸水。仏壇から熟れすぎた桃が香って、庭先にはまだ鶏が転がっていた。

おじいちゃんの葬式の帰りに塩を撒いて、井戸水を浴びたことを思い出す。ケガレを祓うんだとママが言っていた。それっきり、ママはおじいちゃんのことをほとんど話さなくなった。だからココの葬儀のとき、わたしとフウは最後にココを抱きしめて、その匂いを持ち帰ろうとした。それがケガレなら、ずっと汚れたまままでいいと思った。その日はシャワーを浴びなかった。

ココちゃんはずっとあなた方を隣で見守っていますよ。ある見積もりの葬儀屋はそう言っていた。料金説明の時と同じトーンだった。献花、火葬、納骨のプランですと13万円になります。自分の会社のサービスシステムと同じ程度の確からしさで、葬儀屋は死後のココについて語った。そのなぐさめはプランとは別料金ですか、と聞こうとして、やめた。

でもたしかに今、ココはわたしたちの側にいる。ディフューザーから吹き出す微生物に、クッションのシミに、スマートグラスの映像に。ココはわたしたちの生活ぜんぶに広がって棲み着いている。生物学的な肉体をなくしたココを、わたしたちは濃度でしか語れない。映像、微生物、データ、記憶、そういったものたち全体が雰囲気としてのココを立ち上げる。でもそれは、ココの肉体が生きていた頃と何が違うんだろう。

思い出があるからココはココになる。わたしだって、フウだって、カナタだってそうだ。わたしたちはいろんなところにいろんな形で自分を保存していて、その全体が醸す雰囲気に名前をつけている。わたしたちをつくる無数の欠片は空気の中に散らばっていて、気まぐれに混じりあっている。それはエアロゾルだ。わたしとココとフウとカナタは、出会った時から少しずつ少しずつ、混ざり合ってきた。むしろ、わたしたちは混ざり合ってはじめて、お互いをお互いとして認識できるようになった。

だから、ココの身体が微生物に分解されたからといって、何かが大きく変わってしまったわけじゃない——それはすごく魅力的な考え方だし、実際わたしもフウもここ数年で自然とそう感じるようになってきている。

それでも、こうして一人でシャワーを浴びていると、時々心細くなる。身体を洗い流すとき、急にひとりぼっちになった気がする。汚れと一緒に、なにか大切なものを流してしまうんじゃないか。自分の一部を、みんなの一部を。排水口に水が吞まれていく。それを見ているうちに、わたしはわたしがなにを忘れたのかを忘れてる。

ココ、ウタ、フウ、カナタ。ココ、ウタ、フウ、カナタ。バスルームいっぱい湯気がうねってる。シャワー

に手をかざす。細く柔らかい、真っ白な水流の束。ハンドルを細かく調節して水量を絞る。ショワショワと炭酸のように水がほどける。手のひらがムズムズする。ココの毛並みを撫でていた時を思い出す。

わたしはシャワーヘッドにディフューザーと同じアンプルを差し込んでみる。ココを取り巻いていた微生物環境を再現したオーダーメイド。しばらくして、水の香りがわずかに変わった気がした。動物性の脂の香ばしさ、甘酸っぱいタンパク質の刺激。それらをなめらかな香りの膜が覆う。ジャスミンとハニー、それからホワイトムスク——微生物がココのシャンプーの匂いまで再現するはずがない。だからこれはきっと、わたしの記憶の香りなんだ。

冷たくなったココを最後に抱いた時の記憶。それから数日経ってようやくシャワーを浴びた時、わたしはなんだか取り返しのつかないものを一緒に洗い流してしまった気がしていた。でもそれはただ一時、わたしを離れたただけだったのかもしれない。あの日、排水口に流れていったココの香り。わたしはそれをもう一度、シャワーから嗅いでいる。ココは濃くなったり薄くなったりしながら、わたしを取り囲んでいる。

わたしはうがいをするように、シャワーの水の束に口を突っ込む。香りが一段と強くなる。甘く苦い水の味。「ココがいちばん濃いのはどこ？」そう口にしてみる。水であふれたわたしの口はただ、ごぼごぼとっている。

scene 5
リビング
—
フウの場合

ココのお腹がゆっくりと上下する。その度にスルスルと金色の光の筋が走る。毛並みをかき分けて、肉球と握手したり、尻尾をくすぐったりしながら床に散らばって、溶けてゆく。いびきと一緒に鼻から星屑が噴き上がって、わたしやウタに降りかかる。光が集まってココの毛並みは金色に沸騰している。その向こうに朝陽が見える。

「あれ、つけてるの。久しぶりだね」

わたしがそう言うと、ウタはイタズラっぽく笑ってココを指差した。

「ココがあんまりぐっすりだから」

さっきからヴィジュアライザーが、ココから噴き出す欠片をしきりに抽象的な映像に変換している。お腹を投げ出してグウグウ寝ている彼女を静物とみなしたらしい。

「きみもたまにはじっとしてみてよ。鼻からラメ吹き出してるよと見てみたいから」

わたしがそう返すと、ウタはわざとらしく背筋をシャンと伸ばして、スマートグラスを指で押し上げた。

うちのヴィジュアライザーは計算量を抑えるため、基本的にインテリア以外の微生物環境を描写しないように設定している。おかげで一日中走り回っているカナタやココ、デスクワークでも落ち着きのないウタはヴィジュアライザーにつかまらず、いつもわたしばかりが自分のパーソナルスペースを光のダンスで披露するはめになっていた——それもあって、最近ではめったにつけてなかったんだけど。第一、いまどき一日中ヴィジュアライザーのスイッチをオンにしている場所なんて、病院カラボくらいだろう。

「ココのはいつも金色だね。おかげでだいぶ神々しくなった」

ウタはそう言って、ありがたそうにココを拝む真似をする。わたしもそれに合わせて冗談を飛ばす。

「よく拝んどきなよ。わたしたちの『古くて新しい家族』なんだから」

「微生物、この古くて新しい家族」——うちみたいな微生物対応のバイオスマートホームが市場に出始めたころは、そんなキャッチコピーが踊っていた。そのときはまだ、微生物環境を可視化する装置も「ヴィジュアライザー」なんてパリッとした名前と呼ばれていなかったし、見た目だって仰々しいグラフとデジタルメーターがモニタに出てくる程度だった。

それからしばらくして、すれ違うほとんどの人がスマートグラスを掛けるようになると、ARで空間を直接飾り付けるやり方がヴィジュアライザーの主流になった。こうなるともう、映像表現の洗練とセンサーの精度くらいしか競い合うものは残らなかった。

緑や黄色の毒々しい蛍光ドットで示されていた微生物は、やがて花や草木、鳥や雲、星空なんかの映像に取って代わられて、結局うちみたいな抽象表現に落ち着いた。自動生成される無数の視覚パターンが空間を撫でる。トロトロ、キラッ、パチパチ、などなど。ウタによれば、いまではもっとシンプルになっていて、環境音の濃淡が例の「古くて新しい家族」とやらをほのめかしてくれるらしい。

「そっちも回そうよ、せっかくつけたんだし」

ウタはそう言いながら、ディフューザーのアンプルを付け替える。わずかな沈黙をはさんで、吐出口から湧き出す粒子のムードが変わる。さっきまでの青みがかったミストから、黄色い光を放つグリッターへ。

「香らないアロマ」、加湿器のように空間に微生物を足してくれるバイオ家電は、そんな売り文句とともにあらわれて、いつのまにかディフューザーと呼ばれていた——もっともそのころは、いわゆる健康グッズの間だと思われてたみたいだけだ。

でもしばらくして微生物の解析と培養、保存技術が進歩すると、家の微生物環境をデザインするって発想はがぜんリアリティを帯びていった。今じゃディフューザーは「空間のサプリメント」なんて呼ばれて、わたしたちの生活のインフラに近い存在になっている。

実際わたしも、朝起きたらまずディフューザーを回して、思いっきり深呼吸をする。そうしないとなんだか、一日がはじまった気がしない。それはつまり、顔を洗ったり、歯を磨いたり、パジャマを着替えたりすると同じレベルの話だってことだ。

ディフューザーは解析した微生物環境のバランスをもとに、それを補うような微生物の群集をミストにして撒いてくれる。微生物環境の多様性が高まって、お互いが牽制し合うってことらしい。要するにこれは、整理整頓の話なんだろう。セーターは二段目、靴下はランドリー、空き缶は右のボックスで、ココのお皿はソファの横。あるべきところにあるべきものが収まって釣り合うこと。それがもっと細かい単位でできるようになったってわけだ。

カクテルの内容はヒト由来、動物由来、植物由来とさまざまで、その気になれば特定の環境を再現することだってできる。カクテルショップにいとってみるといい。ツヤツヤのガラスアンプルにあらゆる空間が収納されて並んでる。屋久島の原生林からチベット高原、ボリビアの湖畔からカリフォルニアのワイナリーまでより

どりみどりだ。わたしの最近のお気に入りはお瀬の湿原。ウタはこの間、蔵王の知り合いの酒蔵をオーダーメイドしていた。

さっき取り替えたアンプルもそんなオーダー品の一つ。でも、これはとびきり特別のやつだ。ココの3歳の誕生日のときのリビングの微生物環境の履歴が、そっくり再現されている。

「こんなところかな」

ウタがディフューザーの出力を調節する。わたしは速度を変えながらこんこんと湧き出す黄色の光に目をこらす。光の欠片の一つ一つが少しずつ色調を変えている。シャンパン、タンジェリン、アンバー、ハニー、マスタード、そしてゴールド。わたしは、ココが吹き出した星屑と同じ色の欠片を見つける。

そうしてるうちに、光を追いかける視線がウタとぶつかって、なんだか照れ臭くなる。ウタはそんなわたしを見て笑いかける。ブラウンの虹彩に光が吸い込まれる。ウタは視線を外して、どこを見るともなく呟く。

「ハッピーバースデー、ココ」

部屋じゅうが黄色の光に満ちる。砂漠に霜が降りたらきっとこんなふうなんだろう。わたしはいつもこの瞬間を、空気が騒ぎ出したみたいだって思ってしまう。本当はずっと、みんな、騒いでいたのに。終わらないパーティ。わたしは簡単にそれを忘れて、簡単にまた思い出す。そしてきっとまた、すぐに忘れるんだろう。

空間を光が支配して、二人とも砕けたキャンディみたく輝いている。ウタが目を細める。赤みがかった瞼がチラチラとまたたく。それがいつものアイシャドウのせいなのか、今はわからなかった。

Coco in the room



Characters

Fou

Human female. 35 years old. Uta's partner. She works as a food coordinator, analyzing food product microbes and the gut microbial environment, using the data to design pre- and probiotic recipes. She is a third generation immigrant with an Indian grandmother overseas.

Uta

Human female. 33 years old. Fou's partner. Works as an actuary at an insurance company, specializing in comprehensive risk assessment, including policy holders' microbial environment. Born on a farm in the Tohoku region, she enjoys gardening as a hobby.

Kanata

Human male. 11 years old. Fou and Uta's adopted child. Perhaps because he is part of the generation raised from birth to treat microbe perception technologies as a normal part of everyday life, boundaries between himself and others are blurred. Recently he is obsessed with boxing and Go.

Coco

A female West Highland white terrier (Westie). Lively, with a particular liking for ball games.



"I'm so sorry to have to ask so suddenly. It's just that I don't know anyone else who's used to looking after pets."

Uta brought Lee to the desk. She lowered her head apologetically as she spoke. Fou stood up and gave a bow. Her work chair revolved slightly, then came to a halt.

"Please don't worry about it. It's Hanoi you're going to isn't it?"

It was the evening before last that their neighbor Lee had contacted them. She told them that she was going away for family reasons, leaving the house empty for three or four days, so would they mind looking after Q-ta? Just at that time Uta was pulling up burdock in the garden, and Kanata was teasing Coco with a stuffed toy that made noises. It was a bat. Fou checked the calendar and said simply, "Yes that's fine." About a sixth of 2041 was over.

"It seems my grandfather's not well. I'm really so sorry to trouble you."

Although a tall woman, she was hunched over in apology, unconsciously trying to make herself look smaller. Held in Lee's arms, Q-ta's actions couldn't have been more of a contrast, as he made his presence felt, wagging his tail so wildly it seemed it might even fall off. He snorted and snuffled away happily. The sounds he made were like air escaping from a damp sack, characteristic of a dog with a short snout.

"You can put him down if you like," said Fou, and Lee thanked her, crouching to set Q-ta down. Q-ta immediately jumped from Lee's arms and bounded around Uta's feet. His paws made a tapping sound on the rug. Simultaneously, Coco, who had been watching all this unfold from the living room, rushed over.

"Coco, stay!" said Uta in a curt command. But she was ignored. Coco was dancing around both Lee and Q-ta in a vigorous figure-of-eight movement. Coco was twice as quick as Q-ta. She brought her nose close to check the scent time and again, then skipped round the two visitors. She seemed intent on checking out every inch of these two visitors, the first in a very long time.

"Is that a Westie?" asked Lee curiously, as she adjusted the smartglasses with her finger. "She's just too energetic for her own good," said Uta with a wry smile as she picked Coco up. Seemingly satisfied that she had checked out the visitors thoroughly, Coco gave a brief snort. The ceiling ventilation system gave a low whirr and mist blew from the living room diffuser. It mixed with the breeze streaming in from the garden. Bittersweet, with just a hint of leather. The house's sensing system had registered Lee's and Q-ta's microbial environment.

"Does he have any non-food allergies?" asked Fou, before continuing, "We have outdoor ventilation and a diffuser, so I think he should be okay," but before she could finish her sentence, Lee laughed, saying that Q-ta would be fine. Uta said, "It's just that Pekinese have sensitive noses and skin, so I thought I would increase the ventilation."

"Say hello again to Q-ta," said Uta as she let Coco out of her arms. Coco gave her body a big shake. Her white fur ruffled and in a heartbeat she bounded over to Q-ta and snuggled close to him, trying determinedly to smell his rear. Fou and Uta were surprised to see Q-ta respond to this by moving his face close to Coco's behind. For the next few minutes, these black and white furballs spun around in circles together before disappearing into the living room.

Uta asked Lee some more detailed questions about Q-ta's care and Fou took the dog food into the

kitchen. "He needs walking for 30 minutes a day and brushing, and has his microbial environment checked before bedtime. Oh, and also a 'forest breezes' diffuser, if that's not too much trouble," murmured Lee, adding, "I think that's about it." Her eyes peered upwards to the ceiling, wondering if she had forgotten anything. When she next looked around she noticed that the two furballs were out of sight, even though they had just been in the living room. Kanata called out from the sofa, "Q-ta's gone out into the garden." The three adults around the desk hurried out to the garden.

Q-ta and Coco were digging up the earth in the garden, just between the tomatoes and the egg plants. Lee jumped forward to pick up Q-ta. It was Kanata who noticed that he had something yellow in his mouth.

Lee's shoulders hunched up even more as she apologized, "We've only just arrived and this has already happened."

"Don't worry about it, it's good that he found it."

Q-ta had Coco's favorite ball in his mouth. Fou and Uta thought that it had been lost a long time ago.

After seeing Lee out, Fou returned to her work chair, muttering, "How did he know where to find it?" Looking at the tattered old ball scratched with teeth marks, Uta and Fou wondered aloud together.

"He must have a good nose."

"I thought that Pekinese don't have a very good sense of smell."

"Even so, it must be better than human senses."

Lying at Uta and Fou's feet, Coco and Q-ta eyed the ball with anticipation. Fou noticed where their eyes were focused, grabbed the ball, and threw it across the living room. The two dogs leapt up almost simultaneously. Two balls of fluff, one white, one black, rushed across the room, following the arc of the yellow projectile.

scene 2
Balcony
—
Kanata's perspective

I think it was probably around April. All day long the earth had been bubbling, releasing clouds of microbes that stretched over the balcony and across the sky. Uta had told me once before that this was “*Keichitsu*,” or the “great awakening,” which is like a signal for all the insects and plants that have been asleep through the winter to come back to life.

The activities of our garden are more or less the same each year. Yomogi (Wormwood) leaves quickly grow bushy and lush and peas seem to flash their small white and purple flowers. The smell of celery bursts out, making the air all tingly and numbing. Cabbages absorb water, and the white milky sap dripping from their center dissolves as vapor. Here and there I hear a few wild herbs and plants popping as they shake their spores. White butterflies and ladybugs are watching these various attractions of our garden from far away.

Even so, that is just a fraction of all the life it holds. I know that there are still many other microbes biding their time in the soil, waiting for their turn to emerge. They slip and curl through the network of tangled roots and mycelia and swirl upwards in the yellowish April sky.

Some of these microbes fall on my skin, making *me* a part of *we*. So something that starts from *me*, gradually expands to become *we*. It is that *we* that flits around Uta and Fou and also strides over Coco too. *We* pass through the window, and float around the balcony, before being flung out into the city. On the breeze, *we* and *you* meet and overlap with one another. Then *we* may unexpectedly unravel and be deconstructed once more. A tingling numbness spreads from the outside to the core of the body. It's a feeling like when you stretch as hard as you can after first awakening, or when chocolate melts in your mouth. *We* bring the me back into focus, and *I* open *my* eyes.

Fou says that it is only younger children who can understand the movements of microbes, plants and animals in this way. She says that it is thanks to the fact that from the time I was born I have been brought up to naturally link my own senses with sensor data, which means natural simulators are an intrinsic part of me—or something like that. Fou is a little bit envious of me, saying, “If I could do that I would be able to think up better recipes,” but I wonder if she would say that if she could really feel and sense how overpowering the spring-to-summer season is. There's a flood of microbes, bringing pollen and pheromones with them. During this season it seems like the entire city is always feeling merry, and it makes me dizzy. When I say this, Uta comes up with the same line every time, saying, “It's not as bad as hay fever is it?” Feeling all pouty, I give Coco a rub down, and then blow the cloud of microbe dust that rises up over in the direction of Fou and Uta. The smell of wet asphalt fills the room.

Joking around like this I couldn't help but think about what happened earlier when *we* blew around the garden. It wasn't what you would call a sense of discomfort. It was more like a sign of something to come, like a baby tooth that's just starting to come loose. All kinds of things find their way into our garden. I've found rats and crows, and recently there was even an injured flying squirrel curled up in the shade of a rock. I am always the very first to notice these visitors, because they always create extra noise that *we* sense. Even so, today feels a little different. It's not that something has wandered into the garden. The atmosphere seems a little stiffer than it usually is at this time of year. Coco is concentrating all her attention on licking my hand.

*

After that I decided to pay as much attention to the garden as possible. Looking at it through fresh eyes, I realize that the garden is more alive than I have thought. The white flowers seem to shine and the fragrance of the dokudami (fish mint shrub) becomes even stronger. Sometimes Uta goes out to the garden to fetch shungiku (chrysanthemum leaves) and udo (spikenard). The weather becomes unsettled and the blue of the tsuyukusa (asiatic dayflower) appears dully. And very soon, the blue falls down with

raindrops. The raindrops trickle over the still-hard skin of the tomatoes. A snail licks the petals of a mukuge (hibiscus flower) and beside it a frog lurks silently.

Uta has said that our garden is an ecosystem that is made by combining native plants that grow naturally with edible vegetables and fruits, and ornamental plants and flowers. According to her the combination of plants is important, taking into account such things as plant height, time of flowering, time of fruiting, time of withering, the animals that plants attract, and their nutritional requirements. Uta is very proud of the fact that she created our garden in consultation with a professional landscape gardener.

In fact, the garden, although undoubtedly very lively and brash, always feels like a whole, with everything in harmony together. It's the same whether you look at it from the perspective of appearance, sound, smell or microbes. Overall it moves slowly, with various parts constantly being replaced. I think it's similar to being by the seashore, with the shape of the beach and its sand constantly changing as you watch the waves come and go.

Once you've experienced that hectic, dizzying feeling sometimes it can make you feel a little lonely. It is a sense of the endless fusion with plants, animals, people, and the city through microbes. The lines between *you* and *we* become blurred. For some reason I feel nostalgic for strangers wandering through the streets. *We* expand and grow, ultimately *we* are alone in the world.

Fou and Uta say that we are a family. Fou, Uta and Coco are all important to me. But that is perhaps because ultimately all of them are a part of *we*. How is a family different from *we*? How far can a unit called a family extend? How far is it okay for me to stretch the definition of what I see as a family? I start to feel uneasy at the sun's rays, interspersed between the rainy season showers. The clouds hang low and loom large, growing and expanding. Just as if I was being pinched, I realized that my sense of discomfort in the garden is getting bigger.

*

It was a particularly hot day, and the shiso (perilla) leaves that had grown so tall were crispy and dry. It was due to the heat that the garden was a little quieter than normal. Over in the corner I heard something unfamiliar crackle and ran out into the garden. The tomatoes were bright red around my feet and the earthworms were casting only shadows on the rock. The sound was definitely coming from around here, right at the end of the garden, where I had thought something was strange. I carefully looked through the grasses and weeds. Nothing there. I couldn't stand the burning sun on the back of my neck and looked up. From the shadow of the balcony railing I could see what looked like a melted candle hanging down. It was a honeybee hive.

"Do you know what there is on the balcony railing?!" I was really excited to ask my question, but felt let down by the response I received. Both Fou and Uta seemed to have known about the hive for a while. But why would they have thought to have looked there? I thought they don't even notice the changes that happen in the garden. The hive had just started to be built by the bees and very few were flying around.

Fou said, "I saw Coco fidgeting nervously around and thought that there must be something wrong." Uta nodded in agreement. I looked at Coco. As usual she had her tongue out and was wagging her tail. I put my smartglasses on and then took them off again. I concentrated and adjusted my senses to Coco's surroundings. Even then everything looked the same as usual. Just like always, Coco was excited at the thought of having someone to play with.

"I don't know what's wrong."

"Coco was stung by a bee when she was little."

"Her face got all swollen."

"Since then, whenever there are bees nearby she always pulls a solemn face."

"She's probably still afraid."

"I still don't know what's wrong."

"Really? Take a good look."

"She's just the same as always."

In the end I couldn't see any difference in Coco. When I try to concentrate on her for a long time, sometimes I feel as though she is directing tension into the garden. In the end I got so frustrated I couldn't distinguish what was real from my assumptions. Uta smiled and said, "Well that's because Coco has been with us for nearly 20 years." I didn't know if she was saying this to console me or to boast. Without saying a word I snatched Uta's smartglasses and threw them away. Coco set off after them at a furious pace.

*

Stepping out into the garden, the air is chilly and the ripe air is noticeably thicker. It reminds me of the sake brewery ampoule that Uta often burns inside in the room. The red of the karasu-uri (japanese snake gourd) crawling up the wall seems to replace the hozuki (chinese lantern plant). I push my way through and rest my back against the stone. The world is moving slowly. It feels like diving into syrup.

Suddenly I remember that all of us—Fou, Uta and Coco too—all share the same air. Fou and Uta don't understand the microbe flows or the sun scalding of plants like I do. But what they do understand are the smells of summer, the breezes of spring, and Coco's expressions. In a world of blurred distinctions, each one of us seeks to define abstract lines in our own particular way. I recall Monet's *Water Lilies* from class. Monet, who was almost completely blind, painted that picture, envisioning it from the back of his studio. So it's not a painting of a garden, but rather the picture itself is the garden. It's the same as *me* misunderstanding the contours within *us*. That is what having a garden is all about.

A long time ago Uta once showed me a map. According to her it's called potential natural vegetation and it means the vegetation that grows naturally without any help from humans. Even this city, if left untouched, would be taken over by plants little by little, which would all be connected together. That somehow seems very natural to me. Even so, there are scenes that are unique to the garden and I find that comforting. I, Fou, Uta and Coco all feel the same way. I still don't really know how far I can call it a family and how far I can expand *we*. Lately, though, I have come to want to create something that I can say is my garden. And those who I will show it to will of course be Fou, Uta and Coco.

scene 3
Kitchen
—
Fou's perspective

A white antenna is standing straight up, there between the stools. It waves impatiently from left to right, the bushy hair bristling. For some time Coco has been circling round the cardboard boxes in the kitchen, seemingly attracted by something.

“She knows what’s inside, after all everything in there is her favorite.”

Uta seems impressed by Coco’s instincts as she calls from her work chair. The boxes contain sweet potatoes, carrots, pumpkins and daikon. Everything that Coco loves. We cook the vegetables from the garden regularly, but unusually this time we have a bumper crop. There’s so much that it more than fills two cardboard boxes.

“Then why not play with her for a while over there?”

I throw a ball over in the direction of Uta’s desk to get Coco’s attention. Then I spread out the contents of the boxes across the kitchen. The rugged vegetables each make their own pose on the worktop. Some are sitting, others lying down, and still others trying to do handstands. They move around a little, displaying their respective characters, and then come to a stop. The soil still attached to their surfaces falls off and dissolves in the water in the sink. The aroma of compost wafts up to my nose.

When was it that I first heard that somewhere in America they could compost human bodies? “If you mix woodchips with some microbes and place them in a coffin with a body, in about a month it returns to earth, and it’s even possible to have your body decomposed with mushrooms if you like.” I thought it was a bad joke at first. Back then, if someone had told you at the time that in another decade or so you too would choose this for your funeral, you would have thought they were kidding.

Actually, while there were only a few pioneers who were quick to try and compost humans, the reverse was true for pets. Composting of pets was passionately supported by people who realized that it offered a “way to send off animals appropriately,” while also serving as a “rehearsal for a new type of human funeral.” Uta and I gathered information on the subject shortly before Coco died. We learned that cremated bones don’t decompose easily to earth, and also got to know how to grow sweet potatoes in the home garden. We thought that if we were going to keep something related to her close to us, her favorite treats would have been better than calcium pellets. Anyway, in time Coco turned into jet black compost. Uta and I scooped it up little by little and mixed it with the soil of our garden. From that year more types of fruit and vegetables has been cropped in our garden.

“Let’s try that! Um...rice cooked with vegetables.”

Uta comes into the kitchen holding Coco. It looked as if she gave up on work to play with her. I have been chopping onions and I take off my smartglasses to wipe the tears from my eyes. In an instant Coco disappears from where she was in Uta’s arms.

Like the smart houses of the past, bio-smart homes like ours come equipped with assistant functions. The difference between the two is that our house’s assistant is not just an independent AI, but also an entire virtual persona that collates the information collected from the vast numbers and types of sensors installed around the house. You could say that it is an avatar that expresses the feelings of the house, and it is through this avatar that we communicate with the house.

Uta and I customized this avatar, creating a 3D model of Coco. The Coco we can access through our smartglasses is created from data compiled over the course of the years while Coco had a physical body. She is the same as she was from her appearance, through to her movements and the microbial environment surrounding her body. With her pointy ears and shiny fur, she curls up under the table for a

nap and the moment you're not looking she tries to pull out the carrots from the garden.

"That's fine, it will also be good for a packed lunch for Kanata tomorrow. That's okay, isn't it?"

I call to Kanata in the living room and get a positive grunt in return. When I put my smartglasses back, Coco is already dozing on the other side of the sofa.

It's certainly the case that now there is only a fragile sense of Coco's being, bound together by images and a microbial cocktail. We can no longer experience the strength of her small body tugging on her lead. However, through our house assistant the new incarnation of Coco is synchronized with our house. The atmosphere of the house is reflected directly in Coco, so in other words the fact that we continue to live here means that we remain in touch with Coco. The languid air of the late afternoon in the room and the peacefully sleeping Coco are in such perfect harmony that you could almost innocently believe it.

I finish some other dishes while the rice is being cooked, frying some sweet potatoes and root vegetables and mixing them with a sweet and sour sauce. Thinly sliced radish and carrots flavored with bitter orange combine to make a simple vinaigrette salad. I make a broth from the leftover vegetable scraps, then take a little break.

"Shall I bring in the jar from the garden and we can have a taste?"

Saying this, Uta brings in a large jar from the outside. It's a riot of tightly packed, colorful vegetables glistening in oil, and when you open the lid, a complex aroma rises up. There is the stimulating kick of spices like cumin and ginger, combined with the rich and mellow flavor of mustard oil, with the acidity provided by the lactic acid fermentation bringing all flavors together well. Kanata appears on a stool, poking the jar.

Sun-dried vegetables and spices, covered with hot oil, are all packed into a jar. Then all you have to do is leave it out in the sun and let fermentation do its work, and in about a week it's ready to eat. This is apparently a method of pickling that is familiar to everyone in India and Nepal. Friends ask me if I learned how to do it from my mother, but all I did was to arrange the ingredients based on instructions I found online. At home neither my mother nor my father can make any food that seems particularly Indian. It's a different story entirely for my grandmother and other distant relatives though.

We aren't usually aware or think about the fact that we all have our roots in Africa, whether we live in Europe, Asia or America. My relationship with India is like an extension of that. Speaking of India, it seems that there's a religion there that apparently forbids the killing of microbes. I heard from my grandmother that my great uncle was a member of that religion, and he wore a white mask and swept his feet with a broom as he walked. I also think about the lives of microbes when I am cooking. But rather than feeling sorry for them or feeling sinful, my thoughts are more along the lines of microbes helping things to look delicious and getting on well with each other.

The rice cooked with sweet potatoes and the other dishes are soon polished off. I make rice balls from the portion of rice I kept to one side and put them in the fridge. There are still lots of vegetables in the cardboard box. I call Uta and Kanata into the kitchen and get them to wash their hands well.

"Uta take care of nukadoko (the rice bran base) and Kanata, you do the leaves, alright?"

Saying this, I *apply* gloves on both Uta and Kanata. At our house I analyze every fermented food we make to see how it's coming along. I then create a microbe cocktail that could help to improve fermentation, and mix it in when we are pickling the vegetables. Uta and Kanata each wear gloves with

different strains of mainly lactic acid bacteria and then they respectively put the carrots in nukadoko (the rice bran mix) and mix the chopped radish leaves with chili, pushing everything into the fermentation jar. In this way I can keep an eye on fermentation and also collect data for my work at the same time.

The other two finish helping me and leave the kitchen. I open the pantry door. The pantry monitors the microbial environment of foods and reports on their ripeness, fermentation status or decay. You could say that the pantry is like a little bio-smart home. It's usually a facility that people use for food product management or for support if they're not used to fermenting things. In my case, I have linked our pantry to my company's design system and am using it as a lab for creating prototype fermented foods.

I pick sweet potatoes, both whole and thinly sliced. It may even be better to keep the soil on them. I could also mash them to a paste. I'm pretty sure that in Amami Oshima there is a fermented drink made from sweet potatoes and lactic acid bacteria. Lactic acid bacteria, acetic acid bacteria, koji malt, yeast, and a few types of molds. I make preparations for various fermentation, separating the space in the pantry. I seem to remember that when making Japanese sake, there's a way that you can change the nature of enzymes by playing sound to the koji malt. This makes me start to think about where I could insert speakers into our pantry.

It's often said that there's not much to separate fermentation from decomposition, and essentially both are the break down of matter by microbes. Coco was broken down to become compost, which now grows her favorite sweet potatoes. We use those to cook and eat, and also make fermented foods like this. Coco is broken down, reborn, down and reborn once more. Coco's presence is everywhere, in the room, in the soil of the garden, and even in our bodies.

What kinds of foods will be created from inside the pantry? I still don't know. But that is what makes it exciting. Creating and cooking food with microbes. I believe that the sweet potatoes made from Coco is fermented and become another version of Coco.

The next time I open the door, from the back of that pantry Coco's face might pop into view. I close the door of the pantry with that image in mind.

scene 4
Shower
—
Uta's perspective

“Where is Coco most dense?”

I ask myself. Hypothetically at least. What are you talking about, you might ask? You don't have to know at the minute. Anyway, I imagine myself asking that question.

In my imagination Fou is stroking the diffuser lovingly. Her nails shine dully. They are the color of burnt sugar. Kanata jumps onto the couch that used to be Coco's favorite. The smell of earth and water float in from the balcony. I turn on the shower handle. The hose shudders and the mirrored surface of the shower head suddenly glistens. Thousands of droplets take shape. I hear a gurgling sound. Once, a long time ago my grandfather taught me how to throttle a chicken. I was about 10 years old. Where I had my hands around the chicken's neck I could feel air and blood trembling as they tried to pass through under my fingers. In the end it died making a sound like something between froth escaping and a voice. A gurgling sound.

Particles of warm water hit my body before flowing onto the tiles. The bathroom fills with steam. I inhale as much as I can. The finely vaporized steam sticks to the surface of my upper jaw and moistens my tongue slightly. The sweet and bitter tang of the water spreads subtly, and always reminds me of Coco's breath.

It was around the time that stories about showerheads being a breeding ground for microbes started to come up in conversation. This made some people so nervous that they opened the window every time they showered or painstakingly dried the showerhead after bathing. In contrast, Fou and I buried our faces in the pure white fur of newborn Coco and breathed in deeply. It was like the smell of popcorn with too much butter. Fou would often sneeze, mumbling that perhaps she was allergic, and then put her nose back into the fur. So it was no surprise to me to hear that those pore-like showerheads were filled with microbes. In fact, it somehow made me feel closer to them.

At some point the showerhead became a laboratory for microbe monitoring. It seemed a valid idea for all those people who were concerned about their health, those who were in favor of the use of microbes, and even those who had no particular ideas on the matter.

Today, just like the diffuser, many showers have microbe cocktail units attached. We insert the microbe ampoule that suits us best at a particular time, arranging the water quality accordingly. Some people have modified the unit so that they can insert mineral or inorganic ampoules, recreating the composition of hot spring water from various locations. Some people have even mixed together resident skin flora to suit a particular skin type and claimed it to be a kind of “bathing lotion.” Some others claim to feed their perspiration to ammonia-oxidizing bacteria and to have not used soap for many years.

I on the other hand did not believe any such stuff. But I guess that it's not so different from the doubtfulness I used to feel about disinfectant products back then. If you don't believe in either reducing or increasing microbes, then why not first try increasing them. I guess that I was still young enough to be able to think like that back then. Also, if I'm being honest, I didn't dislike the water that had an adjusted balance of minerals and microbes. When the water sprayed out of the showerhead, it felt like I could almost smell the aroma of sweet, fermented earth. It was also like ink. It was similar to the water I used to drink at my grandfather's house. Well-chilled water from a well, poured into a glass. The smell of overripe peaches would waft from the family altar and there was still the chicken lying on the yard.

I remember scattering salt after returning from my grandfather's funeral and bathing in well water. My mother said it was to cleanse our bodies of *kegare* or uncleanness associated with death. After that

my mother hardly spoke about my grandfather. That is why at Coco's funeral my thought was to bring home the smell of Coco at the time Fou and I embraced her in our arms one last time. I remember thinking that if that was kegere, then I didn't mind remaining in a state of uncleanliness. I didn't take a shower that day either.

"Coco-chan will always be by your side, looking over you both." That's what one funeral director said when presenting an estimate for the funeral, and it was spoken in the same tone he used to explain the contents of the funeral charges. The plan including flowers, cremation and laying ashes to rest came to 130,000 yen. The funeral director spoke about Coco after her death with the same degree of certainty as explaining his company's service systems. I almost asked, "Are words of consolation and sympathy not included in the plan?" but I stopped myself.

But now, it is certainly true that Coco is by our side. She's in the microbes that spray out of the diffuser, in the creases of the cushions, and in the images in our smartglasses. Coco's presence has spread to inhabit every aspect of our lives. Now that she has left her biological body behind, today we can only talk about Coco in terms of her density. Images, microbes, data, and memories—all these things come together to create an ambient aspect of Coco. Even so, what is the difference from when Coco was here physically?

It is our memories and recollections that make Coco what she is. The same goes for me, Fou and Kanata too. We store ourselves in various ways in various places, and we give names to the overall ambience these recollections create. The countless fragments that make us who we are all scatter in the air, carefreely mixing with each other. It's like an aerosol. Ever since we met, me and Coco and Fou and Kanata have, little by little, been mixing with each other. It's actually almost the case that we became able to mutually recognize each other only after mixing together.

That is why, even though Coco's body may have been decomposed by microbes, it still doesn't feel as if much has changed. That is a really appealing way of thinking and one that myself and Fou have come to feel naturally over the course of the last few years.

Even so, when I am on my own in the shower like now, I sometimes feel lonely. When I am washing my body down, I get the feeling that I have been left all alone. As if something really important and precious is being washed away with the dirt and grime. Part of me and part of everyone, disappearing down the plughole. As I gaze at the water I forget what it is that I have supposedly forgotten.

Coco, Uta, Fou, Kanata. Coco, Uta, Fou, Kanata. The bathroom is full of steam. I put my hand up to the shower. There is a thin, soft, pure-white stream of water. I carefully adjust the handle to reduce the volume of water. The water comes out all bubbly, as if it were carbonated. The palms of my hands feel itchy. I remember the time we used to stroke Coco's fur.

I try putting the same ampoule in the showerhead as I do in the diffuser. It's custom-made to recreate the microbial environment that used to surround Coco. After a while I get the feeling that the aroma of the water has changed very slightly. It's the aroma of animal fat, with the added sweet-and-sour stimulus of protein. A smooth film of fragrance overlays everything. It's jasmine, honey, and white musk, but it's inconceivable that the microbes would go as far as to recreate the smell of Coco's shampoo, isn't it? That must surely be the smell that remains in my own memories.

The memory of holding Coco one last time, after her body had grown cold. When I finally had a shower a few days later, I felt like I had washed away something irreplaceable. But it may have only left me temporarily. The scent of Coco may have been washed down the plughole that day, but I still smell the same scent from the shower. Coco's presence is all around me, rising up then down in density.

I put my mouth into the shower stream, as if I am gargling. The aroma becomes at once stronger. The sweet and bitter flavor of water. "Where is Coco most dense?" I ask myself, but I just gurgle as the water overflows in my mouth.

scene 5
Living room
—
Fou's perspective

Coco's tummy moves gently up and down. Each time it rises and falls a streak of golden light runs through it. As we ruffle her fur, shake her paws, and tickle her tail the light scatters across the floor before fading. Stardust erupts from her nose together with her snores and falls on me and Uta. The light gathers and Coco's fur once more seems to boil in golden glory. Beyond her we can see the morning sun.

"Oh, you have switched it on? It's a long time since we've had that on."

As I say this, Uta smiles mischievously and points toward Coco.

"Because Coco's sleeping almost too well."

For a while the visualizer has been constantly converting the fragments erupting from Coco into abstract images. It seems that the visualizer saw her as a part of the room interior as she lay fast asleep with her tummy upturned.

"You should try sitting still for once. I want to see glitter blowing out of your nose!"

As I respond like this, Uta deliberately straightens her back and pushes up her smartglasses with a finger.

Our visualizer is basically set up to not describe the microbial environment other than the interior, in order to reduce the amount of data computing required. So the visualizer never picks up Kanata or Coco as they run round the rooms each day, or even Uta settled at her work desk, so it was always me who ended up showing off my personal space with a dance of light. Perhaps for this reason, we have rarely had the visualizer on recently. Anyway, the only places where visualizers are turned on all day nowadays are probably hospitals and laboratories.

"Coco's always golden, isn't she? It makes her look almost divine."

Saying this Uta pretends to worship Coco reverently. I joke along with her.

"You should worship her a lot. She is our "old yet new family" after all."

"Microbes—the old yet new family." This was the tag line for all the commercials when our microbe-responsive bio-smart home made its market debut. At that time the device that made the microbial environment visible had yet to be given the snappy name "visualizer" and even the appearance of microbes was still limited to a somewhat exaggerated graph and a digital meter on the monitor.

Sometime after that when almost everyone you passed on the street had started wearing smartglasses, using AR to directly decorate a space became the main way of using visualizers. With this, there was no longer anything that could compete with the refinement of visual expression and sensor accuracy.

Microbes, which were initially shown as poisonous-looking lurid green and yellow fluorescent dots, were eventually replaced by images of flowers, plants, birds, clouds, and starry skies, and eventually it became standard practice to use abstract expressions like we use at our house. Numerous automatically generated visual patterns caress the space, like "marble," "flash" or "tinkle." According to Uta these patterns have become simpler and it seems that the intensity of environmental sounds hint at that original tag line of the "old yet new family."

"Let's put that on too, it's such a long time since we did."

Saying this, Uta replaces the ampoule in the diffuser. After just a short pause, the mood of the particles gushing from the diffuser outlet transforms, from what was a bluish mist a second ago to a yellowy light-emitting glitter.

Bio-electric appliances that add microbes to a space like a humidifier appeared with sales slogans like “scentless aroma,” and before long people started to call these appliances diffusers. Back then though, they were still thought of as something similar to health-promotion goods.

But after a while microbe analysis, cultivation and preservation technologies advanced and the concept of designing your own microbial environment at home started to look like a realistic possibility. Today diffusers are referred to as “spatial supplements” and have become almost a like a part of the infrastructure of daily life.

To tell the truth, every morning when I wake up, the first thing I do is switch on the diffuser and take in a deep breath of air. Unless I do this it doesn't really feel like the day has begun. It's something on the same level as washing my face, brushing my teeth, and changing out of my pajamas.

Based on the analyzed microbial environment balance the diffuser sprays out a mist containing a cocktail of microbes that supplement the environment. Apparently this increases the diversity of the microbial environment and the microbes keep each other in check. I suppose that you could say it's about keeping everything in order. Sweaters are on the second shelf, socks are in the laundry, empty cans go in the right-hand box, and Coco's plate is next to the sofa. To keep everything in balance in the place it's supposed to be. It is that concept that we can now achieve on a much more detailed level.

The microbial cocktail includes microbes of various origins—human, animal and plant—and you can even recreate a specific environment if you should want to. It's a good idea to go to a cocktail shop. Row upon row of shiny glass ampoules are all lined up, containing all kinds of microbes from various spaces within them. You could choose anything, from the virgin forests of Yakushima, the Tibetan plateau, the shores of a Bolivian lake and the wineries of California. One of my own recent favorites is the marshlands of Oze. Uta had an ampoule order made to recreate the environment of a sake brewery in Zao owned by her friend.

The ampoule she has just put in is another order made one. But this is something really special. It's an exact recreation of the microbial environment in our living room at the time of Coco's third birthday.

“Is this about right?”

Uta adjusts the diffuser output. I gaze at the yellow light that is being constantly emitted, while varying the speed. Each fragment of light has a slightly different hue. Champagne, tangerine, amber, honey, mustard, and gold. I find a fragment the same color as the stardust that Coco is emitting.

While following the rays of light my eyes meet with Uta's and it's a little embarrassing. Uta looks at me and smiles. Light is absorbed into her brown irises. Uta moves her gaze away from me and without looking at anything in particular, murmurs.

“Happy birthday, Coco.”

The entire room is filled with yellow light. I imagine it is what a frost-covered desert would look like. I always think of this moment as if the air itself is making a racket, because in reality the microbes are have been abuzz, in a never-ending party. I easily forget such thoughts and then they easily return. Then, once again, I will probably forget them.

Light dominates the space and both of us are gleaming like crushed candies. Uta's eyes narrow. Her reddish lids flicker and flutter. I can't tell just at the moment if it's due to the eyeshadow that she usually wears.

屋里的小可可



人物简介

福

女, 35岁。乌达的伴侣, 移民第三代(奶奶是印度人)。食谱设计师, 研究分析食品微生物和肠内微生物环境, 并运用相关数据开展益菌元、益生菌的食谱设计。

乌达

女, 33岁。福的伴侣, 生于日本东北农村, 平时喜欢养花种草。保险精算师, 擅长对投保人的微生物环境等进行综合风险评估。

卡纳达

男, 11岁。福与乌达的养子, 最近热衷于拳击和围棋。出生时, 微生物感知技术已经相当发达, 在这样的环境中长大的卡纳达, 不会对自己与他人进行明确区分。

可可

西部高地白梗雌犬, 性格活泼, 喜欢玩球。

scene 1
工作间

“突然来麻烦你们，真的太不好意思了。实在是不认识其他养狗的人家。”

小李边说边弯腰鞠躬，显地十分过意不去。乌达把她拉到了书桌边，福起身向她点头示意。办公椅因为惯性，跟着慢悠悠转了个圈。

“不用客气，别在意。你是去河内？”

前天傍晚，乌达在院子里拔牛蒡，卡纳达正在用一个会发出声响的蝙蝠玩具逗可可玩。邻居小李来联系，说家里有点事，需要出门三四天，想让我们照看Q达。“好啊”，福看了看日历，一口答应了。2041年的六分之一，已经过去了。

“我爷爷的情况不太好，真不好意思麻烦你们。”

身材高挑的小李有意无意地弓着背，尽可能地想让自己显得矮小一点。小李怀中的Q达却毫不在乎地把尾巴摇个不停，拼命地刷着存在感，还咕咕、QQ地叫着。那是塌鼻子狗特有的叫声，就像湿口袋漏了气。

福说“把它放下来吧”，小李边道谢边蹲了下来。Q达一下子从小李的怀里钻了出来，围着乌达的脚脖子打圈圈，小肉球用力猛踩地毯，发出踢踏的响声。几乎同一瞬间，可可瞅准了机会迅速从客厅冲了过来。

“可可，不许动！”乌达厉声命令，但根本没用。可可围着小李和Q达写起了“八”字，速度比Q达快一倍，一次又一次地把鼻子凑上去闻了又闻，转了一圈又一圈。很久没有来客人了，可可想把客人闻个够。

“是西部高地白梗吗？”小李看着可可，用手指稍稍调节了一下智能眼镜。“精力太充沛了”乌达苦笑着，把可可抱了起来。估计是闻够了，可可满意地吸了吸自己的小鼻子。天花板上的换气系统发出的低沉嗡嗡声、客厅里喷雾器喷出的雾气，还有院子里吹来的晚风，混杂在一起，飘着略带苦涩的皮革气味。家里的传感系统已经把小李和Q达的微生物环境记录了下来。

“除了吃饭，Q达对什么过敏吗？”福继续说，我们家的换气系统是户外型的，还有喷雾器，应该没问题。话音未落，小李就笑着说，完全没问题。“好像京巴的鼻子和皮肤比较弱，把换气调到强档吧”，乌达插了一句。

“再来和Q达打个招呼吧”乌达把可可放了下来。可可抖了抖飘逸的白毛，只停了一秒，就飞快地跑去拼命地闻Q达的屁股，Q达也把脸往可可和她的屁股上凑。福和乌达大吃一惊。过了不一会儿，一团黑毛和一团白毛打着转转跑到客厅玩去了。

福把狗粮拿去厨房，乌达向小李仔细确认了一些注意事项。Q达每天需要遛个30分钟，一定要刷毛，睡前要确认一下微生物环境，最好用喷雾器给它洗个森林浴，大致就是这些吧。小李望着天花板，想着是不是忘记什么。看了看四周，突然发现那两团毛球从自己的视线中消失了。刚才还在客厅的，哪儿去了？“Q达跑到院子里去了”，沙发那边传来卡纳达的声音。围坐在桌子周围的三个大人急忙向院子跑去。

Q达和可可正在院子里起劲地刨着土，土坑的一边种的是番茄，另一边种的是茄子。小李冲过去一把抱起了Q达。卡纳达发现它嘴里叼着个黄颜色的东西。

“啊呀，一来就闯祸！”小李慌了手脚，身子越缩越小了。“没事没事，还帮忙找到了可可喜欢的那个小球呢”，福和乌达都以为那个球早就不见了。

“怎么找到的呀？”送走小李之后，乌达一屁股坐到办公椅上。“鼻子灵吧”，“京巴的鼻子应该不太灵啊”，“但总比我们灵啊”。看着那个被咬得坑坑洼洼的小球，福和乌达你一句我一句地说着。脚边趴着的两个毛毛团，充满期待地望着小球。福注意到了它们，于是抓起小球用力向客厅扔去。可可和Q达几乎同时跃起，黑白两个毛毛团沿着那黄色抛物线飞奔而去。

scene 2

阳台

—

卡纳达

几乎每年四月都这样。每天从早到晚，尘土飞扬，微生物云朵向阳台之外的天空不断伸展。乌达以前说过，那叫“惊蛰”，是把冬眠的虫子呀植物呀叫醒的信号。

家里院子的变化每年也基本相同。艾草叶凌乱地鼓了起来；豌豆爆出了白色和紫色的小花骨朵；空气中弥漫着芹菜散发出的刺激而又迷人的香气；卷心菜吸足了水分，菜心渗出的乳液融化在白色水蒸气之中；这里还有那里，随处可以听见野菜孢子颤动撞击的声响。远处，菜粉蝶和瓢虫在安静地欣赏这些生命的舞蹈。

其实，这只是一小部分。我知道，土壤里还有无数的小伙伴们在等待出场。穿过交错的盘根和菌丝细网，盘旋在带有些许土黄色的四月天空中。

一些微生物，落到我的皮肤上，逐渐成为我们。我们从我开始缓缓膨胀。我们在乌达和福之间穿行，越过可可，穿过窗户，在阳台转一圈，然后上街。起风了，我们和你们重合在一起。总有一天，我们会化作粉尘碎落飘零。那种感觉，一点一点地从身体之外传递到身体之内。就像是醒来，伸一个大大的懒腰，巧克力在口中慢慢融化。焦点从我们回到了我。我睁开了眼睛。

福说，和以前不一样，现在的小孩生来就能感知到微生物、动植物的变化。因为我们这一代的感官和传感数据从小就自然而然地结合在了一起，这种天然模拟器已经在身体里扎下了根。她还羡慕地说“要是我也有这种能力，一定能开发出更好吃的菜谱”。我倒是希望她能实际感受一下春夏的这般嘈杂，再来感叹。微生物洪水带着花粉和荷尔蒙汹涌而来。每到这个季节，每个角落都漂浮弥漫着微生物，太晕了。但每次我这么说，乌达总会来插嘴反驳，“和花粉症相比，你这算什么呀”。膨胀起来的我撸着可可，叛逆地把飞扬起来的微生物尘粒朝她们两人吹去。屋子里充满了湿漉漉的沥青味。

刚才我们在院子里嬉闹的时候，我感到有什么不对劲。虽然算不上异常，但就像快要换乳牙时的痒痒，可能是某种征兆吧。常常会有各种各样的小家伙混到我家院子里来。老鼠、乌鸦，最近还来了一只受伤的飞鼠，一直躲在石头背后。每次，有杂质混进我们，我总会第一个发现。今天和往常有点不一样，不像是有什么混进来。但和往年的空气相比，有那么一点紧张。可可一个劲地舔着我的手。

*

于是，我决定要好好侦察一下院子里的情况。一眼望去，院子比我想象得更加热闹。白色的小花星星点点地开着，鱼腥草的香味更加浓烈了。乌达偶尔会到院子里摘些蓬蒿菜和土当归。天色阴沉起来，鸭跖草的小蓝花刚刚浮现，雨点子就落了下来。雨滴顺着西红柿坚硬的表皮流下，蜗牛舔着木槿花瓣，青蛙安静地蹲在一旁。

乌达说，我家院子里的生态系统由自然生长的植物、可食用的果蔬以及观赏性花草组成。植物的高矮、什么时候开花、什么时候结果、什么时候凋零、哪些动物会来、需要哪些营养等等，组合方式非常重要。这个院子是乌达的得意之作，她曾仔细咨询过庭园设计师朋友。

其实，院子茂盛也好稀疏也好，整体上总是那么和谐。无论外观、声响、气味、还是微生物。局部不断更替，整体缓慢变化。这与海滩十分相似，潮来潮往，海滩的形状不断发生着变化。

细细品味这眼前的千变万化，我有时候也会感到孤独。通过微生物，我与植物、动物、他人、还有城市无限地彼此融合，你们和我们之间的界限越来越模糊。不知为何，对于街上的陌生人我也会感到似曾相识。我们在无限扩展，最终，世界会变成一个我们。

福、乌达说我们是一家人。对于我来说，福、乌达还有可可都非常重要。但这是否意味着她们最终是我们的一部分呢？家人和我们之间的区别又是什么？家人的范围究竟有多大？我可以把这个圈子扩展到多广？梅雨季节，夹在雨天之间的晴日阳光，渐渐地变成了毫不留情的烈日。云层很低，越来越大，越来越厚，院子里那种异样感愈发强烈了。

*

那是一个特别炎热的日子，高大的紫苏叶干得发脆，院子显得比平时稍稍安静了一些。一个陌生的声音从角落里传来，我立即飞奔了过去。脚边，西红柿的脸庞涨得通红，蚯蚓的影子烙在滚烫的石头上。果然就是这附近，早就觉得不对劲了。我小心翼翼地把草拨开，但什么都没有发现。后脖颈被灼热的阳光晒得受不了，我不由地抬起了头。阳台栏杆的阴影处，挂着一个融化的蜡烛。原来是个蜂窝。

你们知道阳台栏杆那里有什么吗？我得意洋洋地去问乌达和福，却不料两个早就知道了。但她们怎么会去查看那个地方呢？她们是察觉不到的。那个蜂窝才出现不久，蜜蜂的影子也几乎看不到。

福说“是因为可可在那里转来转去，我们觉得奇怪，所以……”，乌达在一边点头。我看了看可可，就像平时一样，可可伸着舌头摇着尾巴。我把智能眼镜戴上取下又戴上，调整感官将注意力集中到可可的周围。可可还是像往常一样兴奋，想让我跟她玩。“为什么呀？”“可可小时候，被蜜蜂蜇过”，“脸肿得像大馒头”，“后来，只要周围一出现蜜蜂，她就不自在”，“直到现在都会害怕”。“我还是不明白”，“嗯，再仔细看看”，“和往常没什么不一样啊”。

观察了半天，我依旧没有发现可可和往常有什么不一样。长时间集中注意力，突然发现自己的紧张情绪也影响到了院子。可能是太在意了，也可能是自己的主观臆想，我已经分不清究竟是为了什么。乌达笑着说，“可可在我们身边快20年了”。不知道乌达的这句话是在炫耀还是在安慰我。我一言不发，一把抢过了乌达的智能眼镜，用力扔了出去。可可像是上了发条，猛地追了出去。

*

院子里，感觉有点凉，空气更加沉闷了。让我不由地想起乌达常在房间里加热的酒窖安瓿瓶。红色的野冬瓜取代了灯笼果，开始攀藤爬壁。我穿行其中，背靠着石头。世界也在缓慢地挪动，就像是在糖水里潜行。

突然想起，福、乌达、可可、所有的一切都在共享空气。虽然福和乌达无法像我一样感知微生物的漂移、植物的微动，但她们能感受到夏天的气味、春天的暖风、可可的表情。在朦胧的世界中，我们用各自的方式定义抽象的轮廓。我想起了莫奈的睡莲。听老师说，几乎失明的莫奈，画了几笔之后，就会退到画室后方远眺，然后走近再继续画。所以，莫奈不是在画画，而像是在造园。那幅画不是花园画，那幅画本身就是花园。找寻我们中的我、发现我的轮廓线，不就是一个自己造园的过程吗！

乌达曾经给我看过一张地图，是关于潜在自然植被的。潜在自然植被，是指不受人为干扰、自然生长的植被。如果人类对自己生活的空间放手不管，就会被植物一点一点地占据，它们最终会连为一体。我觉得这很正常，这就是自然。我家院子也有独特的景观，也挺不错的。我和福、乌达还有可可在一起，感觉很舒服。尽管我依旧不明白家人的范围有多大，我们的范围有多广，但是最近我想造一个自己的小院子。等弄好之后，要给福看，给乌达看，给可可看。



圆凳子的缝隙里，翘着一根白天线。摇摇摆摆，忽左忽右，毛乎乎的。可可绕着厨房里的纸箱转来转去，已经有好一会儿了。

“可可果然知道，里面都是她爱吃的。”

坐在办公椅上的乌达不禁叫了起来。纸箱里有红薯、胡萝卜、南瓜和白萝卜，都是可可喜欢吃的。平时做饭用的就是自家院子里摘来的蔬菜，这次算是罕见的大丰收了，两箱都装不下。

“想玩儿就去那边玩儿吧。”

我把球往乌达的书桌扔了过去，并示意可可。自己乘机把纸箱翻了个身，粗壮结实的蔬菜们滚了出来，有坐着的、有躺着的、还有倒立的，在厨房案板上各自摆出不同的姿势来彰显个性。残留在表面的泥土落了出来，溶入厨盆水中。堆肥淡淡的气味掠过了鼻尖。

听说过美国某地可以把遗体变成堆肥，但不记得是什么时候听说的了。在棺椁里放入木屑和一些微生物，大约一个月后就化作土壤了。据说还可以根据喜好分解成蘑菇，但这应该是说笑吧。再过十几年，可能你也会选择这种葬礼--如果当时有人这么对我说，我一定不会认为那是在开玩笑。

现实生活中，同意把遗体快速变成堆肥的前卫思想还属少数，但对于宠物，情况就大不相同了。有些人十分推崇这种方式，他们认为这既“符合动物本性的丧葬”，又可以当作“人类新型丧葬预演”。我和乌达在可可走之前就开始收集信息，了解到火化后的遗骨不会像预期那样迅速化作泥土，还找了一些如何在自家院子里种红薯的资料。所以决定，与其把变成钙质颗粒的可可留在身边，不如用来种一些她爱吃的东西。不久，可可变成了黑色的堆肥。我和乌达亲手把她与院子里的泥土揉搓在一起。从那年开始，院子里的果蔬种类越来越多了。

“做那个吧，菜饭。”

乌达抱着可可走进了厨房。可可闹着要和她玩，她索性放下了手中的活。我脱下智能眼镜，擦了擦被洋葱辣出的眼泪。乌达怀里的可可瞬间消失了。

和以前的智能住宅一样，我们家的生物智能房也有智能小助手功能。不同的是，现在的智能小助手不仅仅是一个独立的AI，还具有虚拟人格，可以将家里大量的传感信息进行整合。简而言之，就像是“家”的“情感化身”，我们可以通过它与自己的家进行交流。

我和乌达对这个小助手进行了设定，用可知的3D做头像。通过智能眼镜看到的AR可可，是由她肉体活在世间十多年的数据构建而成的，包括外形、体态、动作，以及身体周围的微生物环境等等。毛色光亮、竖起小耳朵的可可，刚才还蜷缩在桌子底下睡午觉，一会儿就跑到院子里拔萝卜去了。

“随她去吧，正好可以用来做卡纳达明天的便当。可以吗？”

卡纳达在客厅里敷衍地嗯了一声。我重新戴上智能眼镜，看到可可已经在沙发的另一头睡着了。

的确，现在的可可是一只由动态图像和微生物混合体组成、实感微弱的小狗。我再也无法感受到她那小身子用力拉绳子的感觉，但是现在的可可能够通过小助手与我们的家进行同步。我们家怎么样，可可就怎么样。也就是说，我们住在可可里面，与可可在一起。午后，屋子里弥漫着慵懒气息，可可呼呼大睡。两者息息相通，超级同步。

煮饭的时候，我弄了几个菜。糖醋油炸红薯根菜，橙味凉拌红白萝卜丝，还用剩下的蔬菜做了个汤。

“把瓶子里的腌菜拿点出来吃吧。”

乌达说着就把瓶子拿了过来，里面是光亮光亮的油和五颜六色的蔬菜。盖子一开，香气四溢。刺激的孜然和生

姜、厚润的黄芥末油，还有酸酸的乳酸发酵，都完美地融合在了一起。不知什么时候，卡纳达也坐到圆凳子上来，夹起腌菜吃得津津有味。

瓶子腌菜的做法很简单，先把晒干的蔬菜和各类香料，浇上热油装瓶，然后把瓶子放到晒得到太阳的地方，让其自然发酵，差不多腌一个星期就可以吃了。据说这种做法在印度和尼泊尔很常见。经常有人问我这是不是我妈教的，其实是我在研究菜谱的时候，偶尔在网上看到的。我们家老爸老妈都不太会做什么像样的印度菜。但是，奶奶和远房亲戚们可拿手了。

无论生活在欧洲、亚洲还是美洲，平时我们不会意识到自己的根在非洲。我与印度的关系，也是如此。据说印度有一种宗教禁止伤害微生物。听奶奶讲，我大伯就相信那种宗教，他平时一直戴着白口罩，走路的时候拿着扫帚边扫边走。我做饭的时候，也会考虑微生物的生命。但不是去想它们可怜、或是自己罪孽深重，而是考虑味道好不好，要和它们好好相处。

香喷喷的红薯饭和其他几道菜，很快就被我们吃了个精光。我把事先分出来的一部分做成饭团，放到冰箱里。纸箱里还剩下不少蔬菜，我把乌达和卡纳达叫到厨房，让他们把手洗干净。

“乌达负责米糠床，卡纳达负责菜叶子。”

我给他们两人喷上了特殊手套。我对我们家所有的发酵食品都做过精心分析，还会在腌制的时候加进自己研制的、有助于改善发酵的微生物混合体。乌达和卡纳达戴着的手套上涂有不同种类乳酸菌，他们把胡萝卜浸泡在米糠床上，把切碎的萝卜叶和辣椒一起塞进大瓶子里。这样，在完成发酵维护的同时，还可以收集我工作所需的数据。

两人完成我交给他们的任务之后，就离开了厨房。我把储藏室门打开。储藏室就如同一个小型生物智能房，可以对食品微生物环境进行监测，汇报腌菜成熟、发酵以及变质的状况。通常，储藏室是用来进行食品管理或是帮助大家管理不太熟悉的发酵过程。我把它作为开发新型发酵食品的实验室，与公司的设计系统连接在一起。

我准备了几个红薯。整只的、切片的，带泥巴的，还可以试着打成糊糊。听说在奄美大岛，有一种用红薯和乳酸菌做的发酵饮料。乳酸菌、醋酸菌、曲霉、酵母，还有几种霉菌。我把储藏室分成几个空间，为不同类型的发酵做准备。据说日本清酒在酿制过程中，会通过对曲霉施加声音来改变酶的性质。我也考虑在储藏室里放一个扩音器，想想放在哪里好呢？

发酵和变质，只差一层纸，但两者的本质都是微生物的分解。可可被分解成堆肥后，长出了她爱吃的红薯。我们吃红薯，把红薯做成菜、做成发酵食品。可可通过分解获得重生，重生之后再分解，循环往复。房间里、院子的、我们的身体里，可可自由自在地跑来跑去。

储藏室里会诞生怎样的食物呢？因为还是未知数，所以特别期待。我和微生物们一起做菜。相信可可变成的红薯经过发酵后，会变成另一个不一样的可可。

我轻轻地关上了储藏室的门，心想当我下次把门打开的时候，可可一定会从里面探出她的小脑袋。

scene 4

淋浴

—

乌达

我问，“可可最浓的地方在哪里？”

不，是假如这么问。

你在说什么呀？

现在不明白不要紧，这是我的想象。

在我的想象中，福轻轻地抚摸着喷雾器，她的指甲散发出淡淡的焦糖色泽。卡纳达跳到可可喜欢的沙发上。泥土和清水的气味从阳台飘了进来。我把水龙头往上一扳，水管抖了抖，花洒顿时绽放开来，千万滴水珠现出身形。“咕噗噗”。小时候，外公教我杀鸡，那年我10岁。鸡拼命地挣扎想要逃脱，我的手紧紧地掐住鸡的脖子，感觉到空气和血液在脖颈下方颤抖。鸡吐出泡泡，叫了几声，死了。那叫声，就是“咕噗噗”。

温润的水珠打在我的身上，流到地砖。我大口大口地吸着浴室里弥漫着的水蒸气，纤细的热气粘在我的上颚深处，觉得舌头有点潮湿，甘苦的水气缓慢扩散开来。这时，我总会想起可可的气息。

坊间开始传闻花洒是滋生微生物的温床之后，一些神经兮兮的人每次洗澡都要开窗，洗好之后也都要仔仔细细地把花洒弄干。但我和福，喜欢把整个脸埋在刚出生的小可可的白净茸毛里，大口深呼吸，因为她闻起来就像加了好多黄油的爆米花。福打着喷嚏，说着可能是过敏，却还要把鼻子凑上去。所以，对于毛孔般的花洒里聚集着无数微生物这个说法，我们不仅没有感到一丝不可思议，反倒觉得更加亲切了。

后来，花洒成为监测微生物的实验场所。那些担心自己健康问题的人、赞成利用微生物的人、或是没有什么特别想法的人，发现了微生物可以带来的好处。

如今，和喷雾器一样，不少花洒都装有微生物混合装置。我们把各自喜欢的微生物安瓿瓶插入其中，调节水质。有人把花洒改装成可以插入矿物质安瓿瓶的装置，重现各地的温泉；有人根据肤质，混入表皮常在菌，声称是“沐浴专用化妆水”；还有把汗水喂给氨氧化细菌吃，说是这几年没用过肥皂。

对于这些，我没有去轻信。其实，这些和以前除菌产品的那种骗人把戏半斤八两。如果不相信减少或是增加微生物有益，可以先试着选择增加微生物。我的这种想法，其实多少还是挺现实的。而且，我对调整过矿物质和微生物平衡的水也没有什么抵触。花洒喷出的水，总会让我想起土壤甘甜的味道，有点像墨汁，像小时候在外公家喝的水。水杯里是冰冰凉的井水，桃子熟透了的香气从佛龛飘来，那只鸡还躺在院子里。

想起外公葬礼结束后，回家撒了盐，还用井水冲了澡。妈妈说那是为了去晦气。从那以后，妈妈几乎再也没有提起过外公。所以，在给可可送葬的时候，我和福最后紧紧地抱了抱可可，想把她的气味带回家。即便是晦气，我也全然不在乎。那天，我没有洗澡。

“可可会一直守护在你们的身边”，一家殡葬公司来报价的时候说了这么一句，但那口吻和谈费用的时候一模一样。献花、火葬、安葬骨灰，一条龙服务，一共13万日币。他们谈论死后的可可，语气就像在讲解自己公司的服务。“您这安慰话，是不是还要另外收费啊？”我不禁想反问一句，但话到嘴边又咽了下去。

如今，可可真的就在我们身边。在喷雾器喷出的微生物里，在坐垫的污渍里，在智能眼镜的视频里，可可活在我们生活的每一个角落。因为可可失去了生物学所说的肉体，所以只能用浓度来表示她的存在。视频、微生物、数据、记忆等所有一切造就的可可，与存在肉体时的可可，有什么不同呢？

因为有记忆，所以可可存在。我也好，福也好，还有卡纳达，我们都一样。我们在不同的场所用各自不同的方式来保存自我，并给整个氛围起名字。造就我们的无数碎片在空中飞扬，随意混合，如同气雾。我和可可、福还有卡纳达，从彼此相遇的那一刻开始，就一点一点地融合在一起。可以说，我们是从彼此融合之后，才开始逐渐了解对方的。

所以，就算可可的身体被分解成微生物，也与以前没有太大的变化——这种思维方式真的很棒。其实，我和福

这几年也都自然而然地感受到了。

尽管如此，每当我一个人洗澡的时候，还是会感到些许不安。用水冲洗身体的时候，会突然陷入孤独，担心有什么非常重要的东西和污垢一起被水冲走了。那是我的一部分，也是大家的一部分。看着被下水道吞噬的水流，我总会想起究竟忘记了什么。

可可、乌达、福、卡纳达。可可、乌达、福、卡纳达。浴室里热气腾腾，我把手伸到花洒前，纤细柔软、白净的水流穿过指尖。我仔细调了调水龙头，让水量变小。滋滋、滋滋，碳酸一样的水冒了出来，觉得手心有点痒痒，想起给可可撸毛。

我试着在花洒中插入一个与喷雾器相同的安瓿瓶，那是为再现可可微生物环境特别定制的。过了一会儿，我察觉到水的气味发生了细微的变化。动物脂肪的香气、蛋白质的酸甜。表面覆盖着一层柔软滑润的香味薄膜，茉莉花、蜂蜜、还有白麝香。其实，微生物根本无法再现给可可洗澡时的气味，所以这一定是我记忆中的气味。

想起最后一次抱起冰冷的可可。过了好几天，我才去洗澡。那时，我觉得生命中最重要的什么被一起冲走了，再也回不来了。但是，又觉得那可能只是一种暂时的离别。浴室里，我再次呼吸着那天流向排水口的、可可的气味。可可一会儿浓、一会儿淡，萦绕在我的四周。

我张开嘴，把花洒的水流对准自己。香气越发浓郁，水味甘甜苦涩。“可可最浓的地方在哪里？”我自言自语，嘴里满是水。

scene 5

客厅

—

福

可可的小肚子一上一下地慢慢起伏。金色的光芒随之闪烁，穿过浓密的白毛，和小肉球握个手，和小尾巴打个招呼，就散落一地，消失殆尽了。小星星跟随可可的呼噜声，一起从鼻尖飞出，落到我和乌达的身上。无数光芒汇聚到一起，可可浑身上下闪耀着金光。远处，太阳升起来了。

“哎，你开了呀？很久没开了。”

听我这么一说，乌达调皮地笑了笑，指了指可可。

“睡得太香了。”

全息可视仪以为露着肚皮呼呼大睡的可可是一个静物摆设，忙着把从她身上散发出来的小星星转换成抽象视频。

“你也站好别动，我要看小星星从你鼻子里飞出来的样子。”

乌达很听话，还故意把背挺得笔直，用手推了推智能眼镜。

为减少家里全息可视仪的计算量，平时设定只需要显示静物的微生物环境。所以，全息可视仪不会去捕捉整天跑来跑去的卡纳达、可可，还有在家工作也不安分的乌达，只有我的空间会出现光环舞蹈。所以，最近基本都不开。现在，从早到晚开着全息可视仪的地方，估计就医院和研究室了。

“可可总是金色的，感觉好神圣啊。”

乌达边说边双手合十朝可可拜了拜。

我也笑着配合她，“好好拜噢。她可是‘我们的老伙伴新家人’！”

“微生物，我们的老伙伴新家人”——类似我家的微生物智能住宅刚在市场上出现的时候，打的就是这句广告词。当时，微生物环境可视化装置还没有“全息可视仪”这么一个明确的叫法，显示器上出现的也不过是有点夸张的图表和数字仪表。

但过了不久，大街上几乎人人都戴上了智能眼镜。运用AR技术，可以在立体空间直接显示的全息可视仪成了主流。后来，就只剩下图像精密显示和传感精度等领域的竞争了。

起先，微生物用绿色、黄色等扎眼的荧光点来显示，后来逐渐被花草树木、云鸟星空等图像所取代，最近变成类似我家的这种抽象视频。自动生成的无数视觉模型在空中飞舞着、扭动着、闪耀着、撞击着……听乌达说，现在更加简洁了，可以通过强弱有致的氛围音乐来表现“我们的老伙伴新家人”。

“可视仪难得开一次，把那个也打开吧。”

乌达一边说，一边给喷雾器换了一个安瓿瓶。四周一下子安静了下来，过了一会儿，喷口喷出的粒子发生了变化。刚才还是蓝色的气雾，现在已经变成闪着黄光的小颗粒。

“无香型熏香仪”，这是增加微生物的生物家电刚上市时用的宣传语。这种类似空气加湿器的仪器，已经逐渐更名为“喷雾器”了，可能是因为当时希望这个产品能作为健康产品被大众接受。

随着微生物分析、培养和保存技术的飞速发展，对家庭微生物环境进行设计的理念逐渐成形。如今，喷雾器被称为“空间益生菌”，几乎已经成为我们日常生活中的基础硬件。

其实和其他人一样，我现在每天早上起床后的第一件事，就是打开喷雾器，大口深呼吸。否则，就会觉得新的一

天没开始。这说明，喷雾器已经和洗脸、刷牙、换衣服一样，成为我们的生活习惯了。

喷雾器会根据微生物环境的平衡状态，喷洒补充微生物混合体，以提高微生物环境的多样性，使其彼此制衡。总之，就是要分类整理，摆放整齐。就像毛衣要放在抽屉的第二格，袜子要扔进洗衣机，空罐头要放在右边的箱子里，可可的碗呢要放在沙发旁边一样，所有东西都要物归原处，保持均衡。

微生物混合体的来源繁多，有人类、动物、植物，甚至可以是某种特定的环境。推荐去微生物混合体商店选购，那里出售内容各不相同的透明安瓿瓶，有屋久岛的原始森林、玻利维亚的湖畔、加利福尼亚的酒庄、青藏高原……我最近迷上了尾濑湿地。乌达有个朋友住在山形县藏王，她上次就根据那朋友家酒窖的微生物环境定制了一个。

刚才换上去的那个安瓿瓶也是定制的，是最最特别的。百分百重现了可可三岁生日时，家里客厅的微生物环境。

“这样差不多吧。”

乌达摆弄了一下喷嘴，我调整了一下喷速，瞪大眼睛盯着不断涌出的黄色光芒。光点颜色开始出现细微的变化，香槟色、橘子色、琥珀色、蜂蜜色、芥末色，还有金黄色。我找到了和可可小鼻子呼出的小星星一样颜色的光点。

我全神贯注地追逐着光点，突然与乌达四目相对，不由地脸红起来。乌达看着我，笑了。光点被她那棕色的虹膜吸了进去，她把视线移开，轻声说：

“可可！生日快乐！”

屋子里充满了金黄色的光芒，仿佛是沙漠里落下的霜。每当此时，我总会感到空气开始喧闹起来。其实所有的一切都在闹个不停，如同一场永不散伙的聚会。我很容易忘记这些，但又会在不经意间想起。毫无疑问，我马上又会忘记的。

在这个由光控制的空间里，我们两个就像闪闪发光的碎糖粒。乌达眯着眼睛，微红的眼皮一眨一眨。不知道，是不是因为她涂了那支眼影的缘故。

ココ・イン・ザ・ルーム

作：青山新
監修：伊藤光平
企画制作：日本科学未来館
デザイン：渡邊竜也（渡邊デザイン）

発行日：2022年4月20日

Coco in the room

Written by Shin Aoyama
Supervision: Kohei Ito
Planning and production: National Museum of Emerging Science and Innovation
Design: Tatsuya Watanabe (WATANABE DESIGN)

Extraordinary: April 20, 2022

